

父は変わり者で、家に居ても会社にも居ても煙たがれていた。  
そんな父を今日は多くの人を取り囲み、口々に語る。

「旦那さんとは20年ほど前にお世話になりました……」  
「お久しぶりです。弟さんの妻の妹です。この度は心からお悔やみ申し上げます」  
「以前お見舞いにお伺いした時は、元気でいらしたのに……」  
「これはこれは、遠くからお越し頂き——」  
「そちらの方はえーと、確か以前一度結婚式でお会いした——」

（私の知る限り）初めて父の元に人が集まったのは会社の中でも、家の中でもなく棺の中だった。

いや、“父の元”に集まったのであればまだ「死んで初めて惜しまれた変人」のエピソードに過ぎなかっただろう。

彼らの視線は終始、邪魔者ですらなくなった男には向いていなかった。

そこで先程まで定型文通りの挨拶を繰り返していた母は、そんな彼らの好奇を楽しむかのようにゆっくりと語り出す。

「……本日は夫の葬儀に集まって頂きありがとうございます。天国の夫もさぞ喜んでいることでしょう。さて、そんな皆様には父の最期の言葉を聞いて頂きたく、この時間を設けさせてもらいました」

母は親戚一同の視線を浴びていると思っているようだが、それは耳だけで実際皆が見ているのは母の横にあるものだった。そこにあるのは二つの大きさの異なる箱。母はまず小さな箱を手に取り言った。

「夫が言っていたのは主に二つ。一つはこちら。中はただの家族アルバムです。死んでもあの世に持って行きたいものは特にない。あえて言うならこのアルバムと一緒に棺に入れておいてくれと言っていました。また中から欲しいものがあれば好きに持って行ってしまっても構わないとも」

そう言ってアルバムの中を皆に見せつつページを捲っていく。そこにはどこにでもある家族の団欒から、月日を追うごとに写真の間隔は開き、全員が映っているものは減っていく。そんな有り触れた内容であった。

それを見せられた親族達は退屈そうに、あるいは焦れたように体を揺すった。

「私としても思い出深い写真ばかりですが、夫が唯一欲したものです。これはこのまま棺に入れてしまっても良いと思うのですがどうでしょう？」

周りからは賛同の拍手がパチパチと鳴った。その顔はやはり退屈そうだ。  
母をそれを確認すると、言葉とは裏腹に何の未練も感じさせぬ動きで棺にそっと納めた。

「それでは二つ目です。まずこの土地と屋敷等と言った財産に関しては事前にお話しした

とおりに、妻である私と、娘、また夫の両親で分配することになっております——しかしそれとは別に」

そう言って母はもう一つの大きな箱——いや、箱などと言う曖昧な単語で表す必要はないだろう。それは誰が見ても明らかだった。大きさは高さが150センチ、幅が70センチ程でそんなものが置いてあれば、目を向けるなどと言うほうが無理だろう。

何の装飾もなくただ頑強さのみを考えられた真っ黒な外観に、ダイヤルと鍵穴が一つ。表面に後から貼り付けてある簡素なメモにはダイヤルの番号が記されている。

「——それとは別にこの金庫の中身は、それを開けた者に譲ると言っていました」

個人で所有するには物騒すぎるその金庫はまるで父の内面のようで、そして鍵だけがどこを捜しても見当たらなかった。

## 2

私の家は裕福な家庭だったと思う。

両親共に稼ぎが良く、母は忙しさゆえに週末以外は家に帰ることはなく、父はそんな母に負けじと例え風邪をひこうが毎日遅くまで働いた（そしてそれが原因で死んだ）。

広い屋敷で餓えることのない日々。普段は遅くまで父の帰りを待つ。母の方針で家で遊べるようなものは何も買ってもらえず、寄り道することも許されない。

週末は家族揃っての夕食。母の詰問とも言える質問に答えることに必死で何の味もしなかった。母はそれを「家族の会話」と呼び満足そうに頷いていた顔が印象深い。

何不自由なく、かといって自由もなく。何もない毎日が続く。

今にして思えば、家に誰もいないのだから勝手に遊んで帰り、家では嘘をつけば良いだけなのだが、当時は母の言葉に逆らう発想自体が出てこなかった。私は生まれながらに鍵をかけられていたのかもしれない。

そうして私自身が不幸だか幸福だかも分からない生活を送る中、父だけはそれを心配してくれた。世間では偏屈と思われた父であったが、娘である私の前ではしっかりと父の顔を持っていたのだ。

しかし父はそこで悩んだ。娘である私は母の言葉に抵触しないように生活している。それを無理やり破らせて遊ばせるのはどうなのかと。その場でそう真面目に悩むところが父の偏屈たる所以なのだが、それでも父なりに必死に考えた末に一つの答を出した。

ある日私は出かける時に家の鍵を取り上げられた。

取り上げた父はプレゼントを渡す前のように楽しそうに説明する。

「鍵は家の敷地内のどこかに隠しておこう。だから毎日それを探すんだ」

それは何かを買い与えるでもなく。

寄り道をさせるでもなく、遊ばせるわけでもない。

ただいつも通りに帰宅するだけの一連の流れ。

それ自体を時間潰しの方法にしてしまおうという考えだった。

そんな抜け道のような方法を思いついた父は今までに見たことがないような笑みを浮かべていた。何の刺激もない生活を送っていた私は、そんな父の顔とその発想を聞いて最初はただ呆然と見つめていたものの、やがて黙って頷き思ったものだ。

やはりこの父はちょっとおかしい。

その日から外壁に昇って自宅を見まわしたり、茂みから顔を出している私を近所の人たちが見かけるようになった。

「今日は高い所から探したほうが良いよ」

「今朝は地面に顔を付けていてすっかり汚れてしまったよ」

……などという父の出かけ際の発言を参考にしているのだ。

その隠し場所は多岐に渡り、しかも日を追うごとに難易度は上がっていく。

私はそれを毎日楽しみに——しているはずもなく、ただ早く家に入りたい一心で探し続けた。我が家はかなり大きな屋敷ではあるが、例え普通の家であっても私ほどに自宅の構造を把握している子供はいないのではないだろうか。

ある日、木にぶら下がりながら双眼鏡を覗いていると、近所の人に話しかけられたことがある。毎日何をしてるの？お家の人はいないの？と。

好奇心からにしろ親切心からにしろ余計なお世話としか思えなかった。それでも一応答えなくては、と面倒くさいながらも聞かれる度にこう返したものだ。

「家族の会話」、その最中だと。

### 3

金庫を前に昔の事を思い出していると、いつも間にか周りの人は散り散りにいなくなっていた。

きっと他の部屋に鍵がないかを探しに行ったのだろう。

この家は部屋数だけでもかなりの数がある。小さな鍵を仕舞える場所となると気の遠くなるような作業で、初めて来たような遠戚はそれはもう宝探しをしている気分だろう。正直、私ですら隠し場所全てに見当が付くかと言ったら怪しい。

中には私に直接聞いてくる者もいた。どこの部屋か心当たりはあるかな？何かお父さんと思い出深い場所とかは？私はそんな場所思い浮かばなかったので正直にないと答える。

そう言うと皆一様に落胆した顔で去って行き、中には隠しもせず舌打ちするものまでいる。まったく……捜し物をするからにはもう少し落ち着いていないと、あれでは父が隠さずとも見つけれないだろう。

しかし私も同じ部屋にいても息苦しいので、必死の形相を浮かべる親族たちを後目に家の中を歩き回ることにした。

思えばこうして我が家をのんびり見回して歩くのも久しぶりかもしれない。

父が思いつきで始めた鍵隠しは、母にそれがバレて父娘共々こっぴどく叱られるまでのおおよそ1年2か月の間。学校のある日はほぼ毎日欠かすことなく続いた。

特に勝敗を決めていたわけではないが、仮にそれを見付けることが私の勝利条件だとしたら、私は全戦全勝だったと言える。あるいは父のヒントの出し方が上手かったのかもしれない。

とにかくこの広さは風潰しに探してどうにかなるものではないのだ。

それを理解した上で探し出すのが幼い私が学んだ最初の一步だったと言えるだろう。

そして2歩目は隠した人のことを想像すること。ただしこれは普段一緒に過ごしていた私に比べて、ここにいる人たちは明確に不利であった。変人と聞いて近づこうとすら、関わりあおうとすら思わなかった彼らには何も想像できまい。

……いや、この場で私以外にもそれが出来る人がいたか。

その人——母は最初は闇雲に探していたのだが、ふと何かを思い出したかのように近親だけに耳打ちして屋敷内から庭へと駆けて行った。母は知っている。私が父と似たようなことをしていたことを。それは家の鍵である以上、毎回外に隠されていたことを。

私もそれを追って外へと出る。

「……………何してるの皆？」

そこで見かけた光景は、母や祖父母等が庭の土を掘り返し、庭石をひっくり返し、花壇を踏み倒してたった一本の鍵を探す姿であった。

「……………」

私は最初は父の遺産などどうでも良かった。誰かが見つけたのなら好きにしていと、好きに持って行ってしまえとも思っていた。そして、いざ鍵探しが始まれば、今度は彼らに見つけられるものかと思った。あんな探し方で見つけれはるはずがないと。

しかし今考えが変わる。

この人たちには探す資格すらないのだと。

母たちは先のアルバムを見ていなかったのだろうか、家族と共に撮った写真がこの家でのものばかりなことに。

少しは考えたことがなかったのだろうか。父が病気になって入院してから多少荒れてしまったものの、それまではしっかりと手入れがしてあったであろうこの庭園のことを。

これは”鍵の場所は初めから分かっていた”私が終わらせてあげなくてはいけないのだ。私は一直線にその場所へと向かう。

途中、灯籠の裏を探す祖父の横を通る。

確かそこに隠してあったのは、父との遊びから2か月目だった。

その日は父が何かをくれると言うので、今日は普通に渡してくれるのかと思えばダンゴ虫を渡されて驚いたことが印象に残っている。

途中、屋根に昇る叔父さんの姿を見る。

そこを搜したのは忘れもしない1年と2か月最終日だ。

父としてはやはりあまり危ない場所は避けていたのか、今までは屋根の上には隠さなかったのだが、いよいよ隠し場所に困り出したのだろう。梯子がかけたままなので探すのは容易であった。

そして私も梯子を片し忘れて母に見つかったのだった。

途中、植木鉢を引っくり返している母を見かけた。  
そこは記念すべき最初の隠し場所だった。  
父は定番と思って最初はそこにしたのだろうけど、そんな定石を知る由もない私は初日から随分と戸惑ったものだった。

途中、池を網でかき回す祖母の姿が見える。  
あそこに隠していたのはいつだったか……。  
とにかく朝起きると父がずぶ濡れだったのですぐに分かった。

そんな彼ら彼女らを見捨てて玄関に入る。  
相も変わらず筆筒や小物入れを漁る親戚たち。  
違う、父はそんな闇雲な場所には隠さない。  
父はいつだってヒントを出してくれていた。  
そして今回だってヒントは出ているのだ。

そして事の始まりの部屋——父の眠る部屋へと戻ってくる。  
この部屋は既に皆探すのを諦めたようで、静寂の中、不気味に金庫だけが存在感を放っていた。  
しかし私が向かっているのは父の遺体そのものではない。ましてや金庫でもない。

父は金庫の話をする前に言っていたはずだ。

——アルバムの中身で欲しいものは持って行っても構わない、と。

私は棺からアルバムを取りだし、一枚一枚写真を取り出していく。  
すると一つだけ何かが引っかかる写真があった。  
尚もそれを無理に引っ張ると——

キン

小さな塊が棺の淵に当たって中へと落ちる。  
金庫の重厚さに比べて小さくどこか頼りない鍵。  
しかし言うまでもなくそれが金庫の鍵なのだろう。

「ふふっ、悪いねお父さん。最後まで勝ちを譲ってあげられなくて……」

私はその鍵を一度拾って手に取った後——今度は棺の奥へと押し込んだ。  
願わくば誰かが偶然に見つけないように。  
母が気付いても見つからないように。

作業を終えた私は棺の横に寝転ぶ。  
父と並んで仰ぎ見る金庫は、作りたての墓標のようだった。

(終)

後書き

テーマはタイトルにある通りに「鍵っ子」。